

# H<sup>OSTELLING</sup> Magazine



巻頭インタビュー

## 古市 憲寿

かつてないほど旅がしやすい今、  
旅に出なきゃもったいない。

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



# MY STANDARD LUNCH PACK



# FRUITY LUNCH PACK



※写真はイメージです。

それは、フルーティなジャム。  
大人も愉しめる、  
3つの味で好評発売中。

ぼくらのミカタ。

# ランチパック



# Digital HI Membership

ユースホステル デジタルメンバーシップ



## 世界中のユースホステルで使える！

世界80の国と地域にあるおよそ3600ヶ所のユースホステルをリーズナブルなメンバー価格で利用できます！



## PC または スマホ でスグ登録！

登録は簡単3ステップ！クレジットカードまたは Paypal の決済後すぐに会員証がメールで届きます！  
Apple Wallet / Android にも対応しています。



## 旅先だけじゃない！ Digital Member だけの特典も！

世界各国のユースホステルが提携している博物館や鉄道などの会員割引提携サービスはもちろん、日本国内の一部のユースホステルでは Digital Member だけが受けられる特典をご用意しています。

スマホで旅する？  
スマホと旅する？



## 登録はカンタン **3**ステップ！

- 1** QRコードまたは日本ユースホステル協会 HP から登録ページへ
- 2** 必要項目を入力して規定を確認。  
クレジットカードまたは Paypal でお支払い
- 3** 世界中で使えるユースホステル会員証 (PDF) がメールで届いて登録完了！



adt/hm14d

※画面はハメ込み合成です。



# Vision

Principle and Philosophy

## *Inclusivity*

世界を超えて

## *Learning and Understanding*

考えよう

## *Sustainability*

僕らと子ども達の未来のことを

日本ユースホステル協会はユースホステルのビジョンに基づき、日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

※本紙の情報は2020年2月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。  
発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会  
編集・発行人 寺島 真  
TEL. (03) 5738-0546  
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1  
国立オリンピック記念青少年総合センター内  
※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。  
制作・印刷製本/サンメッセ株式会社

## Line up

インタビュー ..... P02

古市 憲寿

かつてないほど旅がしやすい今、  
旅に出なきゃもったいない。

Youth Hostel Pick up ..... P08

伊勢志摩へ、出発進行!  
伊勢志摩ユースホステル

Hostelling Magazine × 地球の歩き方... P12

アメリカ西海岸シアトルで大人の社会科見学  
ボーイング社/アマゾン・ドット・コム/  
スターバックスコーヒー

■Seattle 2Days BEST PLAN

Sustainable Tourism ..... P18

20号発刊特別企画 ..... P20

Hostelling Magazineを  
バックナンバーで振り返る。

教えて! 旅GIRL ..... P22

松島むうの晴れときどき旅びより..... P23

巻頭インタビュー

かつてないほど旅がしやすい今、  
旅に出なきゃもつたいたない。

社会学者・作家

## 古市 憲寿

東大大学院修士課程在籍中に出版した『絶望の国の幸福な若者たち』で  
新進気鋭の社会学者として注目を集めた古市さん。

これまでの「若者論」に異を唱えるような言論が大きな反響を呼び、  
現在は様々な討論番組や情報番組にも出演されています。

また、2018年には『平成くん、さようなら』、

さらに翌年には『百の夜は跳ねて』で

芥川龍之介賞候補に選出され、作家としても活躍の幅を広げています。

「メディア出演や執筆活動で多忙を極めている古市さんは

きっとインドア派なんだろう……」と思いきや、

実は常に国内外を飛び回っている行動派！

学生時代の留学体験から、プライベートの旅の楽しみ方など、

ざっくばらんに語っていただきました。

## 海外って、ものすごく 遠い場所だと思っていた

— 海外留学をされたり、ピースボートの乗船経験がある古市さんは、海外経験豊富だという印象を受けますが、初めての海外体験はどちらに行かれたのでしょうか？

留学が初めてですね。それまではハワイとか韓国とか、メジャーな海外旅行先にも行ったことは一回もなく。高校生の頃までは、海外ってすごく遠いもの、全然自分には身近ではないと思っていたんです。ただ、大学のキャンパスが、留学生や海外の人が多く学部だったんですね。周りの学生たちを見ても、留学も海外で暮らしているのも当たり前だし、外国語を喋れるのも当たり前。そういう環境に身を置いたから、自然な選択として海外に留学に行こうかって思ったんですよ。だから大学生の頃に初めて海外に興味を持ったっていうか、むしろ「行かなきゃ」くらいの感じで思っていました。そんなわけで、2005年、大学3年生の夏から1年間、ノルウェーのオスロ大学に留学したんです。

— 初めての海外経験が留学という、いきなり海外で生活するわけですから、怖いというか、不安は大きくなかったですか？

それまでは実家暮らしでしたし、一人暮らしも何もかも初めてだったんですけど、不安はなかったです。なにせ友人たちも結構同じタイミングで留学しますし、すでにインターネットとかもあったので。普通にSkypeで友達や家族とかと映像を見ながら会話もできるし、ネットとかも普通に使えるわけだから、あんまり怖いってことはそこまでなかったですね。でも、飛行機は国内便しか乗ったことがなかったんで、全然勝手が分からなくて。他にも、ちょっとした貴重品とかあるじゃないですか？貴重品はトイレに持って行った方が良いのかとか、パスポートや財布とかをどれくらい厳重に守れば良いのかとか、何にも分からなかったんで、そういう怖さはありましたね。

— 1年間滞在すると、最初の緊張感からは開放されてくるものですか？

そうですね。特にノルウェーは治安が比較的良好な国だったので、夜道も普通に歩けるし、日本と比べて怖いってことはなかったですね。ただ、やっぱり飛行機のチケットの取り方とか分からなかったんで、ノルウェーに行く飛行機のチケットは大学の生協で取ったり(笑)。それくらい全然分からなかったんだけど、やってみたら全部すごく簡単というか、大したことなく。留学中は旅行によく出掛けたのですが、飛行機のチケットを取ることも、ヨーロッパのユースホステルに泊まることもやってみたら全部簡単でしたね。

— もしかして……ヨーロッパでユースホステルをご利用いただいていたのでしょうか？

そうそう。すごく使いました！留学先にノルウェーを選んだことで結果的によくなったと思うのは、ヨーロッパって一回行ってしまったら、どこの国も近いんで、結構いろんな旅行はしましたね。まだ学生でちゃんとしたホテルに泊まれるお金もなかったんで、ポーランドのクラクフに行ったりとか、フランスのパリに行ったりとか、あとは

ドイツのミュンヘンとか、全部ユースホステルですね。あとは、チェコのプラハにも泊まりましたね。その辺は全部ユースホステルですね。

— そうだったんですね！ちなみに、滞在はご満足いただけましたでしょうか……？

(笑)。泊まってみたら全然ストレスないし、同世代が多いんで仲良くもなりますし、旅の情報の交換とかもできるし。ポーランドには留学生の友達2人と一緒に行ったんですけど、旅の途中で陰鬱な雰囲気になってしまっ。でも、逆にユースホステルだったから何とかだったという思い出があります(笑)。一緒に行った友達と陰鬱になっても、そこでできた友達たちと話してればいいからガス抜きができたというか。完全に3人だけで旅行をしていて、仲が悪くなったら終わりじゃないですか？でも、ユースホステルっていう同世代の友達がたくさんいる環境だったから、気が紛れてすごく良かったです。

あとは、値段が手頃だったのもすごくありがたかったですね。特に留学してお金がなかったんで。今だったら海外送金とかも簡単ですけど、当時は手続きも煩雑だったし、手数料も高かった。1年間に必要な費用をあらかじめ日本から送って置いて、その費用の中で1年間暮らさなきゃいけなかったんで。

## 海外旅行は怖くない トラブルでさえも楽しい要素

— オスロに留学されたあと、ピースボートに乗られたんですよね？

そうですね。これはたまたま知り合いに誘われたから、面白そうだな乗ってみようかって。乗るからには無駄にしたいくないなって思って、船の中でインタビューや調査とかをして、ピースボートを研究したことで2倍に楽しめて良かったですね。研究抜きにしても途中でエンジン壊れたとか、船に穴が開いたりとか(笑)。100日間の予定が、結局114日間になってしまったんです。

— そんなにトラブルがある過酷な旅なのですか？

ピースボートって言ってもボロボロの船を借りているので、いつも何かしら問題が起こっていましたね。僕が乗った船はちょうどエンジンが壊れていて、しかも穴が空いていた(笑)。それを含めてすごく面白かったですけど。旅行自体はすごくリラックスした旅でしたよ。乗っていれば勝手に目的地に着くんで、時差もないです。それでもヨルダンのペトラ遺跡とか、エジプトのカイロやピラミッドとか、そういった自分では行かないだろうなってところに行けたのはすごく良かったなって思ってます。ちなみに今は豪華で快適な船に変わったので、あんまりネガティブなことを言わないで欲しいとピースボートのスタッフから言われました(笑)。

— トラブルも楽しめたということですが、海外で怖い目に遭われたことはありますか？

ないですね。ものすごく……というほどではないですけど、そこそこ気は使うんで。例えば、絶対にポケットにファスナーが付いているズボンにするとか、絶対にケータイをファスナーが付いたところに入れるとか、本当に最低限ですけど。あとは、あんまりお金持ちっぽ衣服

装をしていかないとか。本当にきつない格好をしていくので、全然お金を持っているように見られないだろうし。あとは、飛行機に乗る時は、機内持ち込みサイズのバッグにして絶対に預けないのでロストバゲージってこともないです。トラブルが起きにくいような旅は心がけてはいますね。

ただ、ノルウェーにいた時かな？自分のミスで船に乗り間違えたことがあって、その時はボーデって町から、ロフォーテン諸島行きの船に乗ろうとして、それが北向きなんですけど南向きの船に乗っちゃって。なかなか船が北に向かなくて、Googleマップを見ても、どんどん南へ向かっていて。慌ててその船の停まる島を調べたんですけど、どこも人口100人くらいの小さい島ばかりで(笑)。結局終点まで行って、そこで1泊してまた同じ船に乗って帰ってきましたけど。今は検索すれば大丈夫なので、怖いってことはあまりないですね。

## ゲームが広げる交友関係 目的があれば誘いやすいし、誘われやすい

—今でもよくノルウェーには行かれるんですか？

よくってほどではないですけど、ヨーロッパに行くついでにどこか行くってなった時に、友達がいる街の方が行きやすいので。ノルウェーだけじゃなくて、ロンドンとか、アムステルダムとか、オスロとか友達がいる街というのは結構行きますね。僕は「エスケープルーム(脱出ゲーム)」がすごく好きなんですけど、一緒にやる友達のところによく行ってます。エスケープルームは大抵5~6人と仲間がいなくてできないんです。だから誰もいない時は、Facebookとかで知り合いを探して、大学で一回だけこの子と一緒に授業を取ったことがあるかなみたいな感じの、ギリギリの細い繋がり知り合いまでたどって、その子にまた友達を見つけてきてもらって、即席チームを作ってゲームに行くってことはよくやっていますね。大学以来一度も会ってなかった友達に連絡を取って「エスケープルームしない？」って言って、その子の友達を集めてもらってゲームやったりとか。そういうことをやっていますね。

—お伺いしたかったのが、古市さんってすごく交友関係が広いじゃないですか？どうやって色んな人と仲良くなったりされるのでしょうか？

共通の目的があればすごくラクですよ。ただ単に「仲良くなりましょう」ってすごく難しいですよ。何をとっかかりにお互いに仲良くなればいいのか分からないじゃないですか。でも、単純に「アムステルダムでエスケープルームがあって、行かなきゃいけない」という目的があったら、こっちも誘いやすいし、向こうも来やすい。だから目的があって、集まって、結果的に目的がなくなっても仲良くなるって関係が多いですかね。日本で仲良い友達も、「人狼」というゲームだったりとか、ゲームで仲良くなることがすごく多いので、やっぱり何かしら目的があった方が人と人は仲良くなれるなと思います。

—昔からありますよね？「このチケット当たったんだけど」という古典的な誘い方(笑)。

そうそう(笑)。僕の場合は、結果的にゲームを通じて仲良くなった人がすごくいるなって思う。ゲームってそれぞれの思考だったりとか

すぐ分かるので。大人の言うゴルフとかってそれに近いのかなあって気はしますね。エスケープルームって世界中どこにでもあって、特にヨーロッパだとどこの街にもあるんで、トリップアドバイザーとかを見ても、大抵、街のランキングTOP10に載っているくらい、どこの街にもあるんで。だから、訪れた街で「この街つまらないな」って思ったら、まあ、エスケープルームを探してエスケープルームに行っちゃいますね(笑)。

—エスケープルームって、その土地によって個性や特色ってあるんですか？

ありますね。オランダは結構独立系が多くて、例えばエスケープルーム好きが会社を辞めて始めたところとかも結構多かったです。宗教に寛容な国なので、本物の教会の真下で悪魔祓いをテーマにしたエスケープルームがあったりとか、本物の修道院を使ったエスケープルームがあったりとか。結構オランダでは盛んですね。最近もエスケープルームのためだけに行きましたよ。4日間エスケープルームだけを本当にして、朝の8時にホテルのロビーに集合して夜中の2時くらいに解散みたいな。1日8軒くらいエスケープルームだけを回るっていう旅をひたすらしていました。当初の予定では、観光もしようってなっていて、アムステルダム国立美術館に行ったり風車を見に行ったりしたんですけど、みんな10分くらいで飽きてしまって。

—その時はどんなメンバーでエスケープルームツアーを敢行したのでしょうか？

アムステルダムには俳優の佐藤健くんとか、それこそ脱出ゲームとかを作ってる側の松丸亮吾くんとか、いつも日本でもエスケープルームをしている友達と行きました。エスケープルームとかゲームって、限られた時間の中で仲間と一緒に何かを成し遂げるという体験ができるんです。そんなことは実際の生活では難しいじゃないですか。だからこそ、仲間と一緒にすることが楽しいと思っていて。それこそ僕が20歳とかだったら、多分、どこの街に行ってもユースホステルとかでエスケープルーム好きの友達を探して「エスケープルームに行こう！」ってやってたんじゃあないかなあ。

—面白そう！すごくやってみたくまりました。でも、海外だと言葉のカベがありそうで……。

ヨーロッパのエスケープルームは基本的に言語に依存しないものがすごく多いので、英語が多少できればいいかな？くらいで大丈夫です。英語さえできなくてもなんとかなるようなところもすごく多い。だから、日本の脱出ゲームとはちょっと違うかな。基本的に現地の言葉は全く知らなくて、せいぜい英語くらいでなんとかなるゲームばかり。あとはゲームの最中は本当に真剣になるので、英語に関してもヒントとか大抵トランシーバーとかで言ってもらえることが多いので、本気で聞き取って、本気で解かなきゃいけないから英語の勉強にもおすすめです。

## インスタで見た絶景を求めても その「瞬間」にははまだ出会えていない それでもやっぱり懲りずに現地へと赴く

—これまで行った中で特に印象に残っている旅先やお気に入りの場所を教えてください！

最近ドイツのハンブルクがすごく好きで、一昨年(2018年)も去年(2019年)も行きました。多分、港町と人口100万人以上の都市がすごく好きなんです。ハンブルクは人口が意外と多いので、重層的にいろいろなものがあるって、人々の行き交う場所だからいろんな文化があるんです。それに、何回行っても新しい発見があって。多分、今年も来年もまた行く予定です。口コミランキング世界一のエスケープルームもあるので(笑)。まだ行ってないので、友達と行くかって話しています。あとは、最近新しくできたホテル。元々は総レンガ造りの倉庫なんですけど、上の方をぶち抜いてガラス張りのホテル兼コンサートホールにしている、その建物がすごくかっこよくてお気に入りです。国でいうとドイツがすごく好きですね。予測できるというか、日本とすごく近いというか。

—キャラクターというか国民性が日本と近いのでしょうか？

体感として、本当に想像通りになるというか、意外とストレスがないというか……。列車は遅れるし、もちろん日本とは違う部分も多いんですけど、あまり違和感なく暮らせるっていうか、僕にとってはストレスが少ないんです。だから、ハンブルクには1ヶ月くらい住んでみたいですね。あとは、オスロも住んでいたのが好きな街ですね。

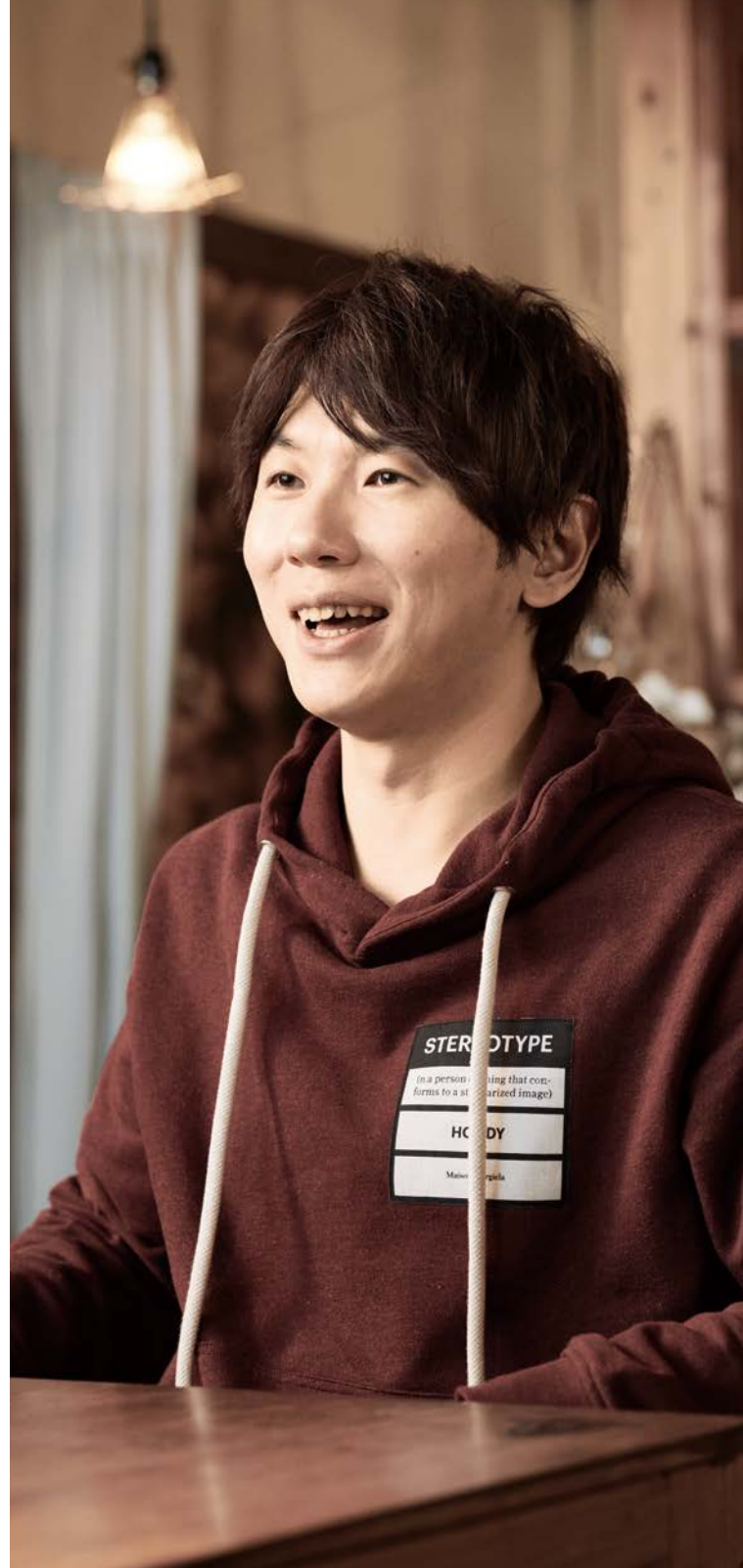
—何となく古市さんの好みが分かってきました！恐らく、好きなのはギリシャとかシチリアみたいな場所じゃないってことでしょうか？

そうそう。それこそギリシャのアテネにも一度行ったんですけど、あんまり南の方は得意じゃなくて。ちょっと僕にはラフすぎるというか。精巧な街の方が好きです。だから、チェコのプラハとか好きですね。積み重なっている感じがすごくして、時計仕掛けみたいな雰囲気があって。だからロンドンとかはすごく好きです。あとは、旧共産圏。ヘルシンキのようなロシアの影響下にあった国とかも結構好きですし、あとはエストニアとか、ドイツも東側とか結構回ったり。ポーランドのワルシャワの巨大なタワーとかも好きです。

—お話を伺っていると、旅のトリガーになるのはエスケープゲームと絶景でしょうか？

そうですね。でも、正直インスタが上がっているような画像を超える絶景を見たことがなくて。大抵やっぱりカメラマンが何時間も何日もいて捉えた一瞬にかなう景色ってあんまりないじゃないですか。だからそれを超えるような素晴らしい光景を見たいなってずっと思っていて、探しに行くんだけど、毎回がっかりするという(笑)。それを懲りずに繰り返しているっていうか。だからモン・サン・ミッシェルに行っても、写真の方が綺麗だし、現地はちょっともったりした田舎の観光地にはしか見えないとか。まあ、それでも物凄い絶景を見たいなって思っていて、いろんな場所に懲りずに行ってるって感じですね(笑)。逆に、ホステリングマガジンさんのオススメスポットはありますか？

—古市さんは歴史的な意味がある場所に惹かれるようなので、ドイツの北の方にナチスが保養所として作ったブローラっていうところがあるんですが……



## Profile

### 古市 憲寿

1985年生まれ、東京都出身。

社会学者・作家。東大大学院修士課程在籍中に出版した『希望難民ご一行様 ピースボートと「承認の共同体」幻想』、『絶望の国の幸福な若者たち』などで現代の若者の生態を的確に抽出。また、世界の戦争博物館を巡り戦争と記憶の関係について考察した『誰も戦争を覚えてくれなかった』などで注目された。また、内閣府国家戦略室「フロンティア分科会」部会委員、「経済財政動向等についての集中点検会合」委員、内閣官房行政改革推進本部事務局「国・行政のあり方に関する懇談会」メンバー、「クールジャパン推進会議」委員などを歴任する一方で、2018年には初の小説『平成くん、さようなら』で第160回芥川龍之介賞候補に、翌年には『百の夜は跳ねて』で第161回芥川龍之介賞候補に選ばれるなど多方面で活躍している。



あー！この前迷って結局行かなかったところだ。一昨年ハンブルクに行った後に行こうと思ったんですけど、コペンハーゲンに行く渡り鳥ラインが廃止になってしまうって聞いてそっちに行っちゃったんですよ。(写真を見て)大人でも泊まりやすそうですね。面白い！行ってみたいですね。

## 大金や語学がなくなっても 地球の裏側へすぐに行ける時代

——最近の日本人の若者を「内向き志向で海外に出ない」「日本人の若者はスマホで行った気になるからだ」と分析する識者もおられるのですが、若者の文化を研究されている社会学者のお立場から古市さんはどう思われますか？

まずは統計的に見てみると、絶対数としては減っていますが、割合としては若者の「海外旅行離れ」とは決して言えないんです。つまり、若者が減っているから減っているように見えるだけということが一つと、あとはスマホって逆に旅と相性が良いって思っています。すごく今ラクだなって思うのが、外国語を使わなくても旅行ができること。移動についても、目的地を日本語のアプリに入れていけば、別に普通に目的地まで着けるし。旅のハードルははるかに下がっているん

で、だから昔よりも旅行をする若者が減っているというのは、あくまでもイメージ先行の部分が大いだと思います。調べられるからこそ、逆に無駄なく旅ができると思うんですよね。それこそ団体旅行みたいにみんなでバスに乗って行って、観光地だけに行く旅行ではなくて、個人的にカスタマイズした旅行がしやすくなっていると思う。

——「パスポートの取得率」に関しては、近隣の国と比較すると確かに低い水準ではあるみたいですよ。

もしかしたら、格差がそこに出ていて、すごく何回も行っている人と行っていない人の差が昔よりも出てきているのかもしれないですね。

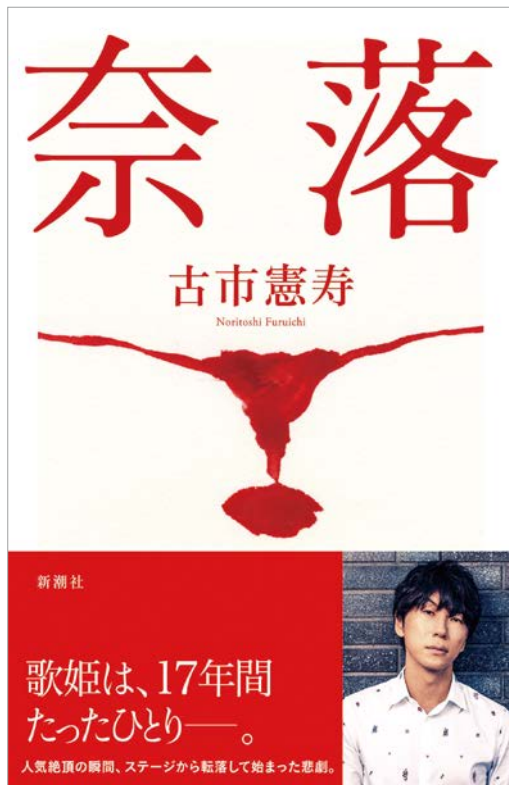
——逆に、まだ海外に行っていない人たちに、古市さんがアドバイスするとしたらどんな言葉を送りますか？

宇宙に行くわけじゃない、ということかな(笑)。同じ地球上にあつて、せっかくお金さえ払えば行ける場所がたくさんあるんだから、もっと行ったらいいのになあとは思いますがね。宇宙に行く前に、地球上だけでもすごく多様な街と多様な文化と多様な景色ってものがあるわけじゃないですか。これだけ安全に、これだけ格安に行ける時代って今までなかったと思うんです。100年前に旅行することはものすごく難しく、ものすごくお金がかかって、多分50年前でさえもすごくお

金がかかって、地球上のあちこちを旅することって誰もができることではなかった。けれど、今ってちょっとバイトしたりとか、ちょっとお金を貯めたら、誰でも地球の反対側まですぐに行ける時代で、しかも情報がかつてないほど検索もしやすいって。本で読むことよりも、体験したことの方が人は大抵覚えていると。いくら写真で見ても、やっぱり情報量が違う。今はVRとかありますけど、そ

れでもまだまだ全然体験には及びません。この先さらにテクノロジーが発達したら別かもしれないけど、現段階の最先端のテクノロジーを集めても、やっぱり直接の体験にはかなわないものはどうしてもあると思うんですね。だから、若いうちは時間がたくさんあると思うので、時間と体力があるうちに旅に出ないのはすごくもったいないなあと思います。

## 古市憲寿さん著書



新刊 **奈落** (新潮社) 1,540円(税込)

これ以上の怖ろしさが、  
この世にあるだろうか。

17年前の夏、人気絶頂のミュージシャン・香織はステージから落ち、すべてを失った。残ったのは、どこも動かない身体と鮮明な意識、そして大嫌いな家族だけ。それでも彼女を生かすのは、壮絶な怒りか、光のような記憶か、溢れ出る音楽か——。生の根源と家族の在り方を問い、苛烈な孤独の底から見上げる景色を描き切った飛翔作。

2018年、初の小説単行本『平成くん、さようなら』(文藝春秋)を刊行。翌年の『百の夜は跳ねて』(新潮社)とともに二作連続芥川賞候補作となり話題を呼ぶ。新刊となる『奈落』は三冊目の小説作品。

PRESENT



古市憲寿さんの直筆サイン入り

小説『百の夜は跳ねて』(新潮社)

抽選で3名様にプレゼント!

ご応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用お申込みフォームから!

<http://www.jyh.or.jp/hm/>

※なお、当選発表は、商品の発送を以てかえさせていただきます。

応募締切

2020年  
4月末日



## つづきをダウンロード(無料)



Hostelling Magazine vol.20  
まとめてダウンロード



Sustainable Tourism ..... P18



インタビュー ..... P02  
古市 憲寿  
かつてないほど旅がしやすい今、  
旅に出なきゃもったいない。



20号発刊特別企画 ..... P20  
Hostelling Magazineを  
バックナンバーで振り返る。



Youth Hostel Pick up ..... P08  
伊勢志摩へ、出発進行!  
伊勢志摩ユースホステル



教えて! 旅GIRL ..... P22



Hostelling Magazine×地球の歩き方... P12  
アメリカ西海岸シアトルで大人の社会科見学  
ボーイング社/アマゾン・ドット・コム/  
スターバックスコーヒー  
■Seattle 2Days BEST PLAN



松島むうの晴れときどき旅びより ..... P23